九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

A Study on the Modernization of Korean Traditional Music in NANTA

李, 敬美
九州大学大学院芸術工学府

https://doi.org/10.15017/19759

出版情報：九州大学, 2010, 博士（芸術工学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

結論

韓国では日本植民地時代に伝統音楽の継承が難しくなったため，1948 年韓国政府が樹立されてからは伝統音楽の継承のための政策を政府が実行し，努力を続けてきた。伝統音楽の継承のための政策にには伝統を充実に保存・継承するための重要無形文化財制度を中心に行い，伝統音楽に時代性を加味して再創造するためには新曲の応募や演奏会を積極的に行っている。大学の国楽科おいても重要無形文化財に指定された音楽と伝統の新たな試みのための 2 つの側面からの教育が行われている。

このように韓国においては伝統音楽の継承活動とは別に，その継承をもとに新たな音楽を創造しようという活動が 1960 年代から始まり，1970 年代から活発になって現在に至っている。その活動を伝統音楽の「現代化」と呼び，韓国の新たな音楽を創造しようという「伝統音楽の現代化」の最も成功した例として，ノンバーバル・パフォーマンス「ナンタ」を挙げることができる。

ナンタはホテルの厨房を舞台に繰り広げられる音楽劇であり，現代劇である。本研究の目的はナンタが「韓国伝統音楽をいかに現代化しているか」を明らかにすることである。研究の根幹をなすのはナンタを，その原型となる韓国伝統音楽「プンムル」や，そのプンムルから派生した伝統打楽器によるアンサンブル「サムルノリ」との比較の観点からの分析である。

ナンタに関する研究は，公演の記録，その記録の整理・分析，そこに含まれる伝統音楽的要素の抽出，劇としての構造分析，などであった。サムルノリとプンムルに関する研究はその演奏の場を対象とするフィールドワークが中心となった。伝統音楽やその現代化に関する研究はその活動を報じる新聞記事等の当時の資料を丹念に調査することが中心になった。

本論の第 2 章では韓国伝統音楽の現状とその現代化の多様な現実についての調査を行い，伝統とは何か，伝統の現代化とは何か，を明らかにした。韓国伝統音楽は宮廷音楽である正楽のみならず，庶民の口承音楽である民俗楽までも

が国立国楽院や他の機関，大学の国楽科などで継承されている。支配階層によって変わることなく維持されてきた音楽と，そこから派生して絶えず民衆によって変化されている音楽をともに「伝統」と見なしている。このことが伝統音楽の現代化を活発に推し進めている要因である。なお，現代化の一例として執筆者自身の作品についても紹介した。

第 3 章ではプンムル，サムルノリ，ナンタの相違点と共通点について大まかに紹介した上で，音楽，踊り，歌，軽業，演劇を含む総合的芸能であるプンムルの演奏形態と地域性について論述した。プンムルは地域行事であり，主体である行事のために音楽はある。プンムルにおいては行事の目的や進行の状況にあわせて音楽も決定・変更されていくので即興的な性格が極めて強い。このようなプンムルにおいては副次的な役割であった音楽に光をあて，プンムルの音楽に，鑑賞されるべき芸術としての価値を付加したものがサムルノリである。それを踏まえ，プンムルとサムルノリで用いられる伝統楽器のケンガリ，チン，チャング，ブクの特徴を記述し，それらの楽器がナンタにおいてはどのような厨房器具に置き換えられているかを分析した。そのことでナンタが伝統音楽の何を継承しているかの一端が楽器の面から明らかになった。

第 4 章ではノンバーバル・パフォーマンスであるナンタを「劇」の側面から分析した。劇の側面からの分析のためナンタとの共通点が多く見られるタルチュムとナンタの制作のために参考にしたノンバーバル・パフォーマンス作品について論述した。

夕方の 6 時までに料理を作り上げなければならないという状況が設定され，料理の完成に向けてトラブルを克服していくという明確な筋書きが言葉を不要にし，音楽表現の重要性を高め，ダンスパフォーマンスを誘発する。ナンタを劇の側面から分析し，音楽演奏とダンス，喜劇的コント，観客の舞台参加への誘導，などがどのようにエピソードとして加えられているのか全体構成を考察した。

第 5 章ではナンタにおける韓国伝統音楽的要素について分析を行った。特にナンタに取り入れられている韓国的感性の象徴とも言うべきリズム定型チャンダンが分析の主要対象にした。またナンタ全体の構成において，チャンダンに

代表される伝統音楽の要素が，それ以外の音楽の要素，例えば現代的なダンス・ミュージックとどのように関連しているかを分析した。

サムルノリの音楽は伝統楽器により演奏される。その意味においてサムルノリは伝統音楽と変わるところがない。しかしナンタにおいては演奏の枠組みに本質的な変更が加えられる。事前に録音された現代のバンド編成によるオリジナル楽曲とチャンダンの同時演奏である。これはチャンダンがオリジナル楽曲のリズムパートとしての役割を果たすということでもある。この方向を拡大すれば，現代のテクノロジーに支えられた演劇という視点から伝統音楽の現代化を捉えることができる。この視点に立てば，ナンタに見られる伝統音楽の現代化とは，チャンダンを総合芸術であるナンタを構成する聴覚的要素として用いることであると言えよう。

プンムルからサムルノリ，サムルノリからナンタへと継承されていく韓国伝統リズム定型「チャンダン」の様相の変遷をたどることによって，ナンタの音楽に見られる伝統音楽の現代化について考察した。個々のチャンダンがどのようにナンタの中に取り入れられ，それが筋書きの進行にどのような彩りを添えているかを明らかにした。

第 6 章ではナンタで見られる伝統と現代の出会いについて例示し，ナンタにおける伝統的要素の現代化ついて考察した。プンムルの儀式・舞踊・軽業などの伝統的要素がナンタにも取り入れていることを実証した。

第 7 章では結論として，ナンタが韓国伝統音楽をいかに現代化しているかについて，次の 5 点を挙げることができる。

(1) 伝統とは縁のない現代劇に伝統音楽を劇の重要な構成要素として取り入れている。
(2) 伝統楽器を身近にある厨房道具に置き換えることで伝統音楽を身近なものとしている。
(3) 伝統音楽の基本となるリズム定型チャンダンを劇の進行に合わせて断片化して取り入れている。
(4) 儀式・舞踊・軽業などの伝統音楽が持つ総合芸能的要素を劇の進行に合わせて積極的に取り入れている。

(5) 伝統音楽における観客参加と同様の効果をだすために，観客を舞台上に呼び込むためのエピソードを劇の進行の中に取り入れている。

韓国の社会も変化し，現在ではプンムルが行われる機会も次第に減少してきた。このような状況の中，現代韓国社会では伝統芸能を伝承するだけではなく，伝統芸能と現代的な要素との融合による「新たな伝統芸能創造」ともいえる試みも行われるようになった。しかし，その試みは必ずしも多くの支持が得られているわけではない。大部分の試みが初演後にすぐに終焉し，長期間にわたる公演に及ぶことは稀である。その中で，ナンタは韓国をはじめ世界中から高い評価を得て，現時点においても盛んに上演が続けられている。どのような理由でナンタがこのように多くの支持を得ているかということを探ることによって，「新たな伝統芸能創造」に必要な現代化の条件を見出すことができるように思われる。

ナンタ成功の要因として第１に挙げられるのは「葛藤」とその「解決」という明快な筋書きを持った音楽劇として企画されたことにある。もともと韓国には行事の中で音楽を演奏するという伝統的な習慣がある。そこで行われる儀式・舞踊・軽業などの音楽外の要素も含んだ一連の伝統的枠組みがシンプルな物語に置き換えられたものとしてナンタを捉えることができる。しかもその中で聞こえてくるものは韓国人にとっては，馴染みの深い音楽の断片である。また，ナンタの物語としての内容は，韓国文化に馴染みがない人々にとっても受け入れることができるものであり，その中からは，これこそ韓国芸能の神髄と思わせるような音楽や動きが展開されることになる。

ナンタ成功要因の第２は，プンムルやサムルノリを構成している韓国の伝統的音楽の基本となるチャンダンを，音楽の中心に据えたことにある。長い伝統によって韓国人の中に育まれてきた伝統音楽に対する感覚は，演奏に反映され，結果として，他の方法では生み出すことのできない質の高い音楽表現をナンタでは実現することができた。また，チャンダンを伝統楽器で演奏するのではなく厨房の道具によって演奏することによって，観客は伝統の新たな姿を感じることになる。

このように見てくれば，ナンタは真の意味で韓国伝統文化を継承した作品であるように思われる。すなわち，ナンタにおける韓国伝統音楽の現代化とは，長い時間を経て，韓国の文化として根付くことになった「表現の枠組み」と「音に対する感性」を伝統から受け継ぎ，個々の事象を現代においてリアリティーが感じられるものに置き換えることではないだろうか。このようなナンタにおける伝統音楽の現代化の方法は，新たな伝統芸能創造に必要な条件を示唆しているように思われる。

本論では，プンムル，サムルノリ，ナンタで用いられるチャンダンの様相の差異を検証することによって，ナンタにおける伝統音楽の現代化の一面を明らかにした。ナンタにおける伝統音楽の現代化の他の側面や作品としての総合的な研究は今後の課題としたい。

また実践的な課題としては本研究で得た結果を参考にし，自身が制作した作品の改善と上演を行いながら，韓国伝統打楽器の表現性を広げていきたいと考えている。韓国伝統音楽と韓国伝統打楽器の本来の特徴と表現性を広げるためコンピュータを用いて新しい方法を模索し，実際に作品を制作していく。これまで行われていない実験的な演奏形態の作品制作も積極的に挑戦しながら，韓国伝統打楽器を用いたマルチメディア音楽作品の可能性を追究していきたい。